

2022年6月5日
宮崎中部教会ペンテコステ礼拝
牧師 乾元美

創世記 11：1～9
使徒言行録 2：1～13
「聖霊に満たされ」

【前奏】

【招詞】エゼキエル書 36：26a

【祈祷】

【聖書】創世記 11：1～9、使徒言行録 2：1～13

【説教】「聖霊に満たされ」

<ペンテコステ>

本日はペンテコステです。ペンテコステは、聖霊が降ったことを記念する日であり、「聖霊降臨日」とも言われます。ペンテコステは、イエスさまがお生まれになったクリスマス、十字架の死から復活されたイースターと並ぶ、教会の最も大切な祝祭日の一つです。

「ペンテコステ」とは、五十番目、五十日目、という意味です。これはユダヤ人が大切にしている「過越祭」というお祭りから五十日後に行なわれる、「五旬祭」というお祭りのことを意味しています。

ちょうど過越祭の時期に、救い主であるイエスさまが、すべての人の罪を贖うために、苦しみを受け、十字架に架かって死なれました。

その後、十字架で死なれたイエスさまは三日目によみがえられました。そして四十日間、使徒たちと共に過ごされた、と聖書は語っています。イエスさまは、ご自分が復活して確かに生きておられることを、使徒たちにはっきりとお示しになったのです。

そして四十日が経ち、イエスさまは天に上げられました。そうして、イエスさまのお姿を地上で見ることが出来なくなったのです。

しかしその直前、イエスさまは使徒たちに、このような約束をしておられました。使徒言行録 1：8にはこうあります。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

イエスさまが天に上げられた後、使徒たちはこの約束の実現を待つために、エルサレムの町に留まり、集まって、一つになって、熱心に祈っていました。それから十日後、ちょうど五旬祭の日に、イエスさまが語られた約束の出来事が起こったのです。

その様子が、今日読まれた 2：1 以下に詳しく語られています。何やら不思議なことがたくさん起こっていますが、それがどのような出来事だったのか。そして、それは何を意味するのか。わたしたちは改めて、ペンテコステの出来事に耳を傾けたいと思います。

<聖霊が降る>

さて、1節にはこうあります。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」

「激しい風が吹いて来るような音」とあります。実際の風ではありません。音です。この天から聞こえた風のような音は、聖霊が来られる「しるし」として聞こえたものです。風は、旧約聖書の時代から、神の霊を表現するものです。集っていた一同は、この音によって、天から聖霊が来られたことを、はっきりと知ることができました。

そして、耳で聞こえる「しるし」の次は、目で見える「しるし」が現れました。

「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」

火や炎も、旧約聖書においては神さまの臨在を示す「しるし」です。旧約聖書の出エジプト記をお読みになったことがあれば、モーセが燃える柴の間から神さまに語りかけられたこと。また、イスラエルの民がエジプトから脱出する時に、神さまが昼は雲の柱を、夜は火の柱をもって民を導かれたことが思い出されるでしょう。

聖霊なる神さまを、人が目で直接見ることは出来ません。しかし、このペンテコステの日、神さまが確かに働かれ、そこにおられ、聖霊が下り、一人一人に授けられた、ということを示すために、神さまは耳で聞き、目で見える、確かな外からの「しるし」を、使徒たち一同にはっきりと現わして下さったのです。

4節に「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました」とあります。

この「ほかの国々の言葉」の「言葉」という単語は、先程の3節の「炎のような舌」の「舌」という単語と同じです。「舌」と「言葉」。炎のような「舌」が現れ、一人一人の上にとどまり、聖霊は使徒たちに「言葉」を語らせたのです。

<わたしたちの言葉で>

さて、この聖霊が天から下る様子。霊によって使徒たちが語らせられた言葉。これには、たくさんの目撃者、証言者がありました。

なぜなら、この日は「五旬祭」というユダヤ人の大きな祭りの日でしたから、ユダヤ地域に住むユダヤ人はもちろん、いつもは他の国に住んでいるユダヤ人も、ユダヤ教に改宗した異国の人も、とにかくみんなが巡礼のためにエルサレムに集まって来る日だったからです。

5節以下にはこうありました。「さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。」

先程「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ」とありました。

この音は、一部の人たちの幻聴などではなくて、エルサレムにいた人々が「何事か!？」と様子を見に集まってくるほどの音だったのです。

そして、こうあります。「そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。『話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。』」

先程の4節に、「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました」とありました。ですから、世界各地から集まった人々は、それぞれに、聖霊を受けた使徒たちが、遠く離れた自分の故郷の言葉で語っているのを聞いたのです。

それはたぶん、わたしがエルサレムへ行って、大きな音がしてびっくりしてそちらへ行ったら、その国の田舎から出て来たような人が、流暢な日本語でペラペラ話し出すのを聞くようなものかも知れません。それは、びっくりして、驚き怪しんでしまうでしょう。

しかも、人々は本当に色々な国から来ていたのです。9節以下には、「わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、…」とあり、どのような地域、国の人たちがいたかが羅列されています。

これは、まだ世界中を行き来することがなかった当時の人々の感覚からすれば、まさに当時知られていた全世界、地上のすべての地名が挙げられていると言っても過言ではありません。「天下のあらゆる国」と表現されているのは、決して大げさではないのです。

そのようにして、天下のあらゆる国の人々が、自分の故郷の言葉で聞いたのは、一体どういう内容の言葉だったのか。それは、11節後半にこう語られています。

「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」。

聖霊が使徒たちを通して、あらゆる国の言葉で、あらゆる人々に対して語らせたのは、同じ一つこと、「神の偉大な業」についてでした。

「神の偉大な業」。それは、神の御子イエスさまによって成し遂げられた、わたしたちの救いのための御業のことです。十字架の死と復活によって、わたしたちの罪を赦し、死から命へと導き、人が神さまと共に永遠に生きる道を拓いて下さった、その偉大な業のことです。それを、あらゆる国の、あらゆる言語の人々が、共に聞いたというのです。

<バベルの物語>

ところで、ここで思い起こしたいのは、今日読まれた創世記の「バベルの塔」と呼ばれる物語です。ここでは、人の深刻な罪の姿が語られ、なぜ人々の言葉がバラバラになったのかが説明されています。はじめの1:1には、「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた」とあります。神さまの導きと祝福によって、世界各地に広まっていった人々、民族は、神さまの恵みのご支配の下で、同じ言葉で語り合い、共に歩んでいたのです。

ところが、ある人々がこう言いました。11：3「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」。

「有名になろう」とは、名をあげよう、名声を得よう、ということです。偉大な者になりたい、という欲望です。そして、その名がずっと後の世までも残るように、天まで届く塔のある町を、自分たちのために建てようとしたのです。

そして彼らは、「全地に散らされることのないようにしよう」と言いました。つまり、神さまによってではなく、そうして自分たちの建設した町によって、自分たちの手によって、全地を治め、人々をまとめようとしたのです。

この物語は、人間が自分たちの名を高めたいと欲し、天まで届きたい、つまり神と同じようになりたい、と願う物語です。そして、自分の名のために、自分の手で、自分たち本位の町を作ろうとするのです。それは人々が、神さまの許で共に生き、共に歩いていくことを拒むことです。そして、自分たちが神のようになって、自分たちの名によって、全地を支配していこうとする、人間の傲慢な罪の現れです。

そのゆえに神さまは、全地の言葉を混乱させ、彼らを全地に散らされた、というのです。

自分の名のために、自分本位に歩もうとすることによって。自分の力、自分の手によって、あらゆるものを支配しようとすることによって。言葉が混乱し、互いの思いを分かち合えなくなり、意思疎通ができなくなる。そうしてバラバラになっていく。

それが、神さまに従うことを拒み、神さまの思いに背いて歩む、人間の罪の姿なのです。

<同じ一つの言葉のもとに>

しかし、このペンテコステの日、世界中からの人々が同じところに集まり、それぞれの国の言葉で、しかし、同じ一つのことを聞きました。

聖霊のお働きによって、あらゆる国の人々に、一つのこと、つまり「神の偉大な業」が語られたのです。言語は違えど、みな同じことを聞きました。

それは、神の御子イエスさまの十字架と復活の御業によって、神さまがすべての人の罪を赦して下さり、神さまと共に生きる新しい命を与えて下さるということ。そして、救い主イエスさまの御許に、救いに与る人々が集められ、聖霊によって一つにされるということです。

言葉も、住むところもバラバラの人々は、イエスさまが実現して下さった、神さまの救いの御業によって、この聖霊が降った日に、共に一つの神の言葉を聞き、イエスさまの救いの下に、再び一つの神の民として集められたのです。

使徒言行録の1：8でイエスさまはこう言っておられました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

言葉が混乱し、全地に散らされた人々のために、罪に捕らわれたすべての人々のために、神さまは救いのご計画を立てられました。そして、神の御子が、その救いの御業を成し遂げ、聖霊が、地の果てに至るまで、その救いの恵みを届けて下さるのです。

まさに御言葉の通りに、使徒たちは聖霊を受け、力を受け、エルサレムばかりでなく、地の果てに至るまで、イエスさまの十字架と復活を証しました。偉大な神の業を語りました。

それは今、遠く離れた時代の、エルサレムからすれば、まさに地の果てにいるような、わたしたちにも語り伝えられました。わたしたちもまた、聖霊にお働きによって、時代も、国も、言語も違うにも関わらず、このペンテコステの日にエルサレムで人々が使徒たちから聞いたのと全く同じことを、神の偉大な御業のことを、聞いているのです。

罪のゆえに、全地に散らされ、言葉が混乱し、バラバラになった人々が、わたしたちが、再び一つになるには。人間の理想や、正義や、信念などでは不可能です。それはやはり、それぞれの思い、それぞれの価値、それぞれの理由を持っているからです。

わたしたちは、ただお一人の神さまの御前に、共に命を与えられ、共に愛され、共に罪を赦された者として、共に立つことによってしか、一つになれないのではないのでしょうか。

神さまは、御子の命を与えるほどの愛を、わたしたちに示して下さいました。そして、神さまがわたしたちに求めておられることは、神さまの愛を受け入れ、わたしたちも神さまを愛すること。そして、自分を愛するように、隣人を愛する、ということです。

この、同じ神さまの愛の中に、同じ神さまの救いの恵みの中に立つこと。同じ御言葉を共に聞き、十字架と復活のイエスさまの御前に、共に立つこと。

ここにこそ、わたしたちが一つになって共に生きる、まことの道があるように思います。

<あざける者もいた>

さて、この神の偉大な業を聞いて、使徒言行録 2 : 12 には、人々は皆、驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った、とあります。

しかしその一方で、13 節にはこうありました。「しかし、『あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ』と言って、あざける者もいた。」

聖書はいつも人の現実をよく見つめているな、と思います。

「神の子が人となって、人間の罪のために十字架に架かって死に、三日目によみがえった。」

これが、わたしたちの救いの知らせです。しかし、これは人間の理性で理解することも、合理的に説明することも、まったく不可能です。信じ難い出来事です。

どうして、世界を造られた神の御子が、弱い人間になって馬小屋でお生まれになるのでしょうか。どうして神の御子が、辱めを受け、裁かれ、苦しんで十字架という不名誉な死に方をするのでしょうか。それが、わたしの罪のためであったとは、どういうことでしょうか。そして、死んだ方が復活させられ、そのことによってわたしたちにも復活の命が与えられるとは、どういうことなのでしょう。愚かなことに思えても仕方ないかも知れません。

宗教改革者のルターも、このように語っています。「世は聖霊の賜物を見もせず、理解もせず、逆に、あざけり侮辱します。実際、私たちの主が言われたこと、語られたことは、すべてこの世に合わず、合わせることもできないのです。」

そして、それは当然のことなのです。天地をお造りになった神さまは、造られた者であるわたしたちの思いも、力も、理解も、想像も、遥かに超えておられるお方だからです。

その神さまが、わたしたちの愛のゆえに、わたしたちの救いのために、成して下さったのが、イエスさまの救いの出来事なのです。

そのイエスさまについての証しも、聖霊の御業も、ある者には驚きととまどいを与え、またある者にとってはあざけるような事として受け止められます。人の理性や理解には限界があります。神の御業は、人の思いを遥かに超えているからです。

だからこそ、わたしたちには、聖霊なる神さまが必要です。天から降り、一人一人の上で働いて下さる聖霊の助けによってこそ、人は、その神の偉大な御業を語り伝えることが出来るし、またそのことを聞いて、心を開き、信じる者となることが出来るのです。

<聖霊に満たされ>

使徒言行録 2：4 には、「一同は聖霊に満たされ」とありました。聖霊に満たされる。

外から注がれるものに満たされるためには、それを受ける器は空っぽでなければなりません。使徒たちは祈って待っていました。神さまに心を向けて、自分を空にして、神さまから与えられるもので満たされるために備えていたのです。

そして彼らは、天から降った聖霊に満たされ、その口から、神の言葉が溢れ出したのです。

ですからわたしたちも、聖霊を求めて、同じように祈り、いつも備えていたいのです。

わたしたちの器は、自分の思いや、理性や、こだわり。願いや、プライドや、信念、色々なもので、すぐに一杯になってしまっています。それは、神さまの恵みを受け取る邪魔をしており、外に出さなければなりません。

最も良いものは、神さまから与えられます。自分から出た、自分自身の中にあるものは、最終的に自分自身を救うことも、助けることも、支えることも出来ません。生きていく上で起こる様々な出来事や、試練を通して、それは明らかになっていくでしょう。

やがて、わたしたちが神さまの御前で、本当は自分が、自分を満たすことができる良いものを何も持っていないことに気付く時。神さまの御前に立って、本当に空っぽの自分を差し出す時。神さまは最も良いものを。罪の赦しと、神さまと共に生きる命と、永遠の喜びを、わたしたちの内に豊かに注いで下さるのです。

自分が空っぽになることは、受け入れ難く、辛く、苦しいことかも知れません。それは、自分の無力さや、弱さや、貧しさを、徹底的に認めさせられることだからです。

しかし、そのようなところにこそ、神さまはご自分の恵みを溢れるほどに注いで下さり、わたしたちを神の霊で満たして下さるのです。

＜教会の誕生日＞

これらが、ペンテコステの日起こった出来事です。

ですからペンテコステは、「教会の誕生日」とも言われます。教会とは、ギリシア語では「エクレシア」「召し集められた群れ」という意味の言葉です。この日、聖霊が降り、神の言葉が語られ、救いの下へ召し集められた人々の群れが、誕生したからです。

この聖霊は、今も変わらず、わたしたちの一人一人の上に、そしてこの教会の群れの上に、働き続けています。これからも変わらず、世の終わりの日まで、イエスさまが再び来られるまで、聖霊に導かれて、教会の歩みは続いていきます。

今日も、これからも、わたしたちは一つになって神さまに祈り求め、一人一人が自分の器を神さまに差し出し、聖霊によって満たされていきたいのです。そして、恵みに溢れて、わたしたちの口が、神さまを賛美し、イエスさまの救いを語り出すようにと願います。

そして、世のすべての人々が、同じ一つの言葉を聞き、同じお一人の救い主に救われ、同じ一つの聖霊に満たされるように。そして、共に神さまの愛の中に、赦しの中に、恵みの中に、命の中に立って、互いにも愛し合い、赦し合い、一つとなって共に生きていくことができますようにと、祈り願います。

【お祈り】

天の父なる神さま

ペンテコステの日、聖霊なる神さまが降って下さり、あなたの救いの偉大な御業を、地の果ての人々にまで届けて下さったことを感謝いたします。

わたしたちも今、聖霊に満たされ、御言葉を聞き、イエスさまの御前に共に集い、一つとされています。どうかわたしたち一人一人も、神さまの救いの恵みを語る者として下さい。そして、イエスさまの罪の赦しの中で、神さまの愛の中で、聖霊の導きの中で、わたしたちが思いをあなたに向かって一つとされて、神さまの御心に従って歩むことができるようにして下さい。

今日あずかる聖餐の恵みもまた、聖霊によって、主に一つに結ばれて、また互いにも一つにされていることを共に味わい知る時です。どうぞ豊かに祝して下さい。そして、一人でも多くの方が、共にこの恵みの中に立ち、この一つの群れに加えられるように。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 3 4 1 「来たれ聖霊、わが主」

【信仰告白】 使徒信条

【聖餐】

【讚美歌】 8 1 「主の食卓を囲み」

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 2 5 「父、子、聖霊に」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン